及川大工を追って

第六回

棟梁家三代で完成―常楽寺

間瀬の人々が大工として出稼ぎを始めたのは、いつの頃か正確にわかりません。

篠原棟梁家が能登に、本誓寺を完成させた頃の文書に「これまで上州（群馬）信州（長野）方面へ出稼を続けてきました。耕地が狭く魚もとれません。出稼を許してください。……」と代官所に願い出ています。

当時、間瀬の地域は出稼ぎしなければ、生活ができなかったのでしょう。本間久兵衛棟梁家は篠原家と同じ年代から信州の棟札に登場してきます。

信州の代表温泉地湯田中温泉に近い中野市、昔ばなし「ぶんぶく茶釜」で有名な群馬県館林茂林寺の末寺常楽寺があります。開基は臨済宗でしたが、上杉氏の戦略的な教線の拡大によって曹洞宗寺院となりました。

この寺は久兵衛、子富吉、孫又吉の三代に亘る本間棟梁家によって完成されました。

棟札に浮かび上がる何代目かの総師久兵衛は天明二年（一七八二）配下を指揮し羅漢殿の建立に着手しました。そして十八年の年月を経て寛政十二年（一八〇〇）に完成させました。

堂は六間四面でかやぶき寄棟です。中世期の技法を基本にして、スッキリと気品高く建立され、古都奈良、京都に立っていたらそのまま通じるような風格をそなえています。この堂が完成してから約五十年後、善光寺地震に遭遇しました。多くの寺院は被害を受けましたがこの堂は少しも狂いを生じませんでした。そして幕末、境内の山門が台風に倒壊しました。壇徒は村中のもち臼と太い麻縄で山門の跡地に、この堂を移動しました。どんなおおきな風にも負けず、立っています。これらからハマ大工久兵衛の名は今も語りつがれております。

文政二年（一八一九）住職は本堂の新築を久兵衛に懇請しましたが、一門を引き連れて間瀬に帰ってしまいました。

壇徒と十三世住職は間瀬を訪れて、土間に頭を付けても棟梁は首をタテに振ることはありませんでした。

本間久兵衛棟梁家が親、子、孫三代で完成させた常楽寺（中野市）

しかし間瀬に帰った大工集団の生活は酷しく、長男富吉が棟梁となって出立しました。

この集団は生活のために気の進まない仕事をせざるを得ませんでした。そして受け継がれてきた本間久兵衛の名前は襲名されることはありませんでした。

棟札に棟梁本間富吉と記されています。

間口十三間、奥行十一間のかやぶき屋根であります。

この本堂の技法は、先代が得意とした中世期の建築技法を主体に、江戸時代らしい技法を加味し、外観は控え目であるが曹洞宗にふさわしい力量感にあふれ、親の作った羅漢堂、背後の山にマッチして建立されています。

現在、この本堂は一躍有名になっています。それは欄間にはめこまれた彫刻が素晴らしいのです。

作品は彫刻を専門にする立川流の作品です。欄間だけに焦点をあてたら確かに素晴らしい彫刻作品でしょう。これらの彫刻は、遠く離れた工房で刻まれ、運ばれセットされるのです。当然、建築物本体に彫られた大工彫刻とは合致しません。構造上から得られる明るさ、暗さの光りの中に浮かび上がってきません。ただ単なる独立した作品にすぎず、全体的な広がりを持ちません。

工房での創作と注文生産のため、題材は画一的でどこでもみられ、独創性に欠けるのは当然でしょう。結果的には間瀬大工の建築構造と欄間とが合致せず重厚さを薄めています。この彫刻集団は自前の大工もおり、一体で完成させた寺院もあります。彫物は向拝部、屋根妻脇障子に限定され、建築の軸部は複雑な形式、技巧的な形式は採用しない。彫り物は大きな丸彫り、浮き彫りが多く、地紋彫りは少ない。などが特徴でしょう。私たちは、この堂に佇み合掌することによって、久兵衛棟梁が首をタテに振らなかった気持ちが理解できました。現在、この欄間の作品的評価だけが先行し、間瀬大工棟梁本間富吉への賛辞の声は少ないものの、いつか建築技法のすばらしさに目が向けられるときがきっとくるでしょう。

（岩室村生涯学習推進本部）

■広報いわむろ　第四三七号　平成十年九月一日発行（毎月一回一日発行）■発行　岩室村役場■編集　総務課■新潟県西蒲原郡岩室村大字西中八六〇（〒九五三―〇一九二）■☎〇二五六―八二―四一一一（代）■印刷　北洋印刷㈱